

「日本人の心視て歩き」～太子町／聖徳太子ゆかりの史跡巡り～

< 訪問先概略資料 >

太子町

大阪府南東部、南河内郡(みなみかわちぐん)の町。1956年(昭和31)磯長(しなが)、山田の2村が合併、町制を施行して成立。町名は聖徳太子御廟(ごびょう)の所在地に由来する。

二上山(にじょうさん)の西麓(せいりく)、飛鳥(あすか)川の河谷にあり、わが国最古の官道竹内街道(たけのうちかいどう)(国道166号)が通る。沿道近くの叡福寺(えいふくじ)には聖徳太子御廟があり、一帯は敏達(びだつ)、用明(ようめい)、推古(すいこ)、孝徳(こうとく)の各天皇陵、小野妹子(おののいもこ)、蘇我石川麻呂(そがのいしかわまる)の墓や、鹿谷寺跡(ろくたんじあと)(国史跡)など飛鳥時代の史跡が多く、奈良の「飛鳥」に対して「河内飛鳥」「近(ちか)つ飛鳥」とよばれている。

また、上述の古墳がある磯長谷(しながだに)地域は「王陵の谷」ともいわれている。

竹ノ内街道

竹内街道(たけのうちかいどう)は、大阪府堺市から東へ向かい、二上山の南麓・竹内峠を越えて、奈良県葛城市の長尾神社付近に至る約26km。この国がまだ日本を名乗る前から存在する日本最古の街道である。2017年に日本遺産に登録された。

両端の難波、飛鳥とも市街地になっていることから、かつて幅30mあったとされるが、飛鳥時代の大道の面影は残されていない

街道沿いには、応神天皇陵、仁徳天皇陵、推古天皇陵をはじめとする古墳が多数あることから、物資輸送路、文化伝達路として重要な役割を果たした幹線通りと考えられている。古市古墳群と百舌鳥古墳群のほぼ中央部を走る東西道路であり、2つの古墳群を繋ぐ道路であったとも考えられる。

一説には、聖徳太子が小野妹子らを中国大陸への使者として派遣した遣隋使が帰国の際に同行してくる大陸からの使者が通るために、立派な道路が必要だと考えて整備したものだといわれる。

用明天皇陵

聖徳太子の父である第31代用明天皇は、『日本書紀』によれば、磐余の池上の陵に葬られますが、その後、推古元年(593)に「河内の磯長の陵」に改めて葬ったと記録されています。

用明天皇陵は、東西65メートル、南北60メートル、高さ10メートルの方墳で、周囲には幅7メートルの空濠を巡らせており、この濠の外堤までを含めた規模は、一辺100メートルに達する巨大な規模を有しています。墳丘規模や形は、蘇我馬子の墓と言われる石舞台古墳とよく似ています。

叡福寺

聖徳太子墓を守護するために、推古天皇によって建立され、奈良時代に聖武天皇が大伽藍を整備したと伝えられる叡福寺は、聖徳太子信仰の霊場として発展しました。織田信長の兵火によって、一時は全山が焼失しましたが、豊臣秀頼の聖霊殿再建に始まり、順次伽藍が再興されました。太子の忌日を偲んで行われる毎年、4月11・12日の大乗会式は、多くの参詣者でにぎわいます。

聖徳太子廟

推古天皇の摂政として、十七条憲法や冠位十二階の制定、遣隋使の派遣などの進んだ政治制度や文化を取り入れ、政治改革を図った聖徳太子は、日本書紀によると推古29年(621)に亡くなり、磯長の地に葬られました。太子墓は径50メートル、高さ10メートルほどの円墳で、内部は精巧な切石を用いた横穴式石室です。太子と母君の穴穂部間人皇后、妃の膳郎女の3人の棺が納められていると伝えられることから、三骨一廟と呼ばれています。

西方院

聖徳太子の死後に、その乳母であった月益姫、日益姫、玉照姫(それぞれ蘇我馬子、小野妹子、物部守屋の娘とされる)の3人が、剃髪して仏門に入り、墓前にお堂を建立して、太子の冥福を祈ったのが寺の始まりと伝えられます。寺の南側の墓地内には、この三尼公の御廟と伝えられる3基の石塔が残されています。本尊は、聖徳太子作と伝える阿弥陀如来と恵心僧都作と伝える十一面観音菩薩像。

尚、「王陵の谷」にある天皇陵は

- | | | | |
|-------------|------|------|---------------|
| ・敏達（びだつ）天皇陵 | 第30代 | 在位期間 | 572～582年？ |
| ・用明天皇陵 | 第31代 | | 585～587年？ |
| ・推古天皇陵 | 第33代 | | 592～628年 初の女帝 |
| ・孝徳天皇陵 | 第36代 | | 645～654年 |

以上

参考資料：Wikipedia の関係ページ

コトバンク

太子町観光案内